

昔國縣沼津在推路村の王族鈴木某へ去明治八年  
よも東京へ出て巡査を勤めて居るがその妻おのぶが

野一花の十九年

貞と心のうまし

おのぶ歌道をも

たしなむと夫の田

主の一人り寝てはたは姑おのぶ



よく存存あり或る日叔母が物をかかへ告るふは

鈴木は東京へ外へ出る貫ツとよぶを捨て置ッ

とよく踏出た途でかきと三三とモシ叔母とる竹戯談

をゆをいゆも心の中を待身よりりの世話も行見

きて私待留まると身は其房の役親を残りて行くも

貞節美言小叔母の言をうとば立帰る跡はかき捨てた心のそと

意筆

おのぶは月を思ふやと終るは

一首もつらね遠くまへおのぶ一八年も若たは感心を嫁に有てません

請賣百廿二号

大阪錦画新話 第十四号



新編 野一花

阿波久松

